

書 評

Jon Barwise: *The Situation in Logic, CSLI Lecture Notes, Number 17 (1989)*.

言葉がどのような意味を持つか、どのような情報を伝えるかは言葉の用いられる文脈や状況に依存する。同様に、人間の持つ信念・知識・意図など何か別の対象を表象する機能を持つ状態（志向的状态と呼ばれる）の持つ意味や担う情報も、その状態にある主体の埋め込まれている文脈や状況に依存する。しかし、これらについて考える際、伝統的には文脈という要因を周回的とみなし、とりあえず無文脈あるいは文脈中立な場合を理想的な場合として想定し、その仮定の上に理論構築を試みるという傾向があった。

そのような伝統に対する反省から、状況理論・状況意味論と呼ばれる新しい意味論の方向が生まれることになった。そこでは、言葉および志向的状态の意味の文脈・状況依存性を、意味について考える場合の中心的な課題として取り上げ、それを形式的・数学的に理論化することを主眼として研究が進められている。

理論の立脚する思想、目指す方向、理論の基本的構造についてはすでに提唱者二人 Jon Barwise と John Perry の共著による本 (S&A と呼ぶ) が出版されている⁽²⁾。本書はその一方の著者、Jon Barwise によって状況理論・状況意味論に関連して書かれた論文を S&A 出版以前のものから最近に至るものまでを集めて作られた論文集である。状況理論・状況意味論が生まれるに至った哲学的な背景から状況・情報・制約など理論の基本的概念の説明と擁護、さらには状況理論の数学的基礎付けの研究の最近の成果が取り上げられている。

状況理論・状況意味論は、Tarski, Russell, Montague 以来の真理条件的意味論あるいは可能世界意味論の伝統を踏襲し、理論の形式化・数学的厳密化を目指している。その一方で、従来の形式意味論の基本的な仮定を見直し、より自然で我々の直観に合致した自然言語の意味論を目指している。そのため S&A の出版後、さまざまな方面から批判的コメントが寄せられた。形式意味論からの批判はもちろん、言語学・認知科学・AI の分野からも批判が寄せられた。これは理論がそれだけ多くの人々の注目を集めていることを示しているともいえるだろう。すでに批判の一部はま

めて著者達の反論も合わせて雑誌の特集号として出版されている⁽³⁾。本書にも、George Lakoff による認知言語学の立場からの批判⁽⁴⁾への反論、Jerry A. Fodor による認知科学の哲学的基礎に関する批判への反論など、代表的な批判のいくつかに対する反論が収録されている。

本書の内容を章立てに沿って簡単に紹介する。全体で3部・14章からなっている。第1部は4章からなり、状況理論・状況意味論の枠組や基本概念について述べた論文が集められている。第1章は S&A 以前に書かれたもので、“John saw Mary run.” のように英語の原形不定詞を補文としてとる知覚動詞の文型の分析に基づいて意味論の対象としての状況の重要性について述べている。第2章では、真理条件に重点をおいていた従来の論理学の考え方では、我々が論理・推論・情報・意味などに関して抱いている日常的な直観をとらえるには不十分であるとし、その代わりとなる新しい枠組として情報概念を中心とした状況理論・状況意味論の基本概念を提示している。第3章では言葉の意味と内容の状況依存性について意味・内容・解釈・発話の意図などの概念の分析を通じて検討している。第4章では、Stalnaker による可能世界意味論の立場からの状況理論に対する批判に答える形で状況概念の擁護、可能世界概念の批判を行っている。このように第1部は、状況理論・状況意味論の基本的な考え方を述べたもので比較的わかりやすく書かれている。

第2部は3章からなり、情報および表象に関する論文が集められている。第5章は条件文の分析を通して情報や意味の基礎となる制約の概念を提示・分析している。第6章、第7章は、ともに Jerry A. Fodor との間でなされた議論の Barwise 側の主張を示す論文である。そこでは表象の内容は埋め込まれた環境からは独立に決まり、推論はそのような表象の形式的操作にはかならないとする Fodor の思考の言語の考え方を批判し、表象や推論の状況依存性を強調した状況推論の考え方を擁護している。第2部は言葉の意味および志向的状态に関してある程度具体的に立ち入った考察がなされており、状況意味論の今後の方向の一端を

示していると考えられる。

第3部は7章からなり、状況理論の数学的基礎に関する論文が集められている。第8章ではまず状況理論と集合論との関係を考察している。従来、意味論は集合論に基礎をおいていたが、そのためにさまざまな問題が生じている。それを解決するために新たに状況概念を中心とした状況理論を作ったが、意味論の基礎として集合論を完全に廃棄してしまうわけではなく、集合と状況との調和が必要だと主張している。その上で状況理論の整合性を示すために、すでに性質のよく知られている集合論を用いるという方向について述べている。また、基礎の公理を外して循環的な構造を許容する集合論を利用して循環的な構造を許容する状況理論が可能なが示されている。この部分については、さらに発展した結果が著者の別の本⁽¹⁾にまとめられている。第9章では循環構造の状況の例として共有知識を取り上げ、そのモデル化を行っている。第10章、第11章は、状況理論の最近の展開を扱った論文で状況・事態・命題といった基礎概念の再検討を行い、その結果出てきた理論発展の方向の可能性を選択肢の形で提示している。第12章から第14章はいずれも技術的な内容を扱った小論文で、循環構造の単一化、循環構造の定義で使われる不動点による定義の正当性、集合論における状況依存性概念を取り上げている。

本書は論文集としての性格上、大部分の論文は単独で読むことが可能である。その反面、全体を通しての一貫性という点では若干難点がある。それは単に記法上の揺れといったレベルにとどまらず理論的な仮定の部分でも論文ごとに揺れている場合がある。特に、第3部で述べられている状況理論の詳細部分では理論の

発展に伴って変化があるし、また著者自身判断が揺れているような理論的な選択もある。その点、読者は注意して読む必要があるだろう。第11章はそのような理論的な仮定の揺れの範囲を整理したものともいえる。

状況理論・状況意味論の基本的な発想は革新的であり、今後、自然言語の意味や情報・推論について考えるときに重要な位置を占めるであろうことには疑念の余地はないと思われる。しかし、本書を読む限り、いわばスローガンというべき基本的発想と、基礎の部分の数学的な議論が盛んで、中間に来るべき問題、例えば具体的な自然言語の意味をどう扱うか、常識的推論や実践推論を具体的にどのように扱うかなどに関する考察が現時点ではまだ不十分と感じられた。理論の調和のとれた発展のためにも、また、さまざまな方面からの批判に答えるためにも具体的な問題を扱った成果が状況理論・状況意味論の今後の発展にとっては重要となるだろう。それに関連して、1989年春から始まり、今後定期的に催されることが予定されている状況理論・状況意味論に関する会議の成果が注目される。

◇ 参考文献 ◇

- (1) Jon Barwise and John Etchemendy : The Liar : An Essay on Truth and Circularity, Oxford University Press (1987).
- (2) Jon Barwise and John Perry : Situations and Attitudes, MIT Press (1983).
- (3) Robin Cooper (ed.) : Linguistics and Philosophy, volume 8, Reidel (1985).
- (4) George Lakoff : Women, Fire, and Dangerous Things : What Categories Reveal about the Mind, University of Chicago Press (1987).

[片桐 恭弘 (NTT 基礎研究所)]